審査員特別賞

「人間ドックに感謝」

新谷　勝治さん

「よう来たてくれたの。もうだいじょうぶで。」
父はふっとため息をつき、少しやつれた顔であったが、いつものように微笑んだ。

夕暮れの中、静まり返った病室に走って行くと、点滴やいくつかの検査の器具に囲まれた父が横になり、静かに私に発した一言であった。それを聞いた私もふっと息をはき、微笑み返した。父は胃癌であったが、無事手術は終わっていた。

私の父は二十年ぐらい前に脱サラをして、都会から田舎にある母の実家に戻り、お好み焼き屋を営んできた。私が結婚して実家の家の近くに家を建て、待望の孫を授かってからは、父は本当に体に気を使い、人間ドックも毎年受けるようにしていた。その甲斐あって、特に大きな病気もしていなかった。

そんな中，一昨年末、父と母は夫婦で毎年受けている人間ドックのため、病院に行った。その後、数日間、音沙汰がない中、私の母が
「お父さん、胃癌かもしれん。」
と涙目で言ってきた。癌など全く他人事であった私にとって、胸がギュッと締め付けられた一言であった。
「まだようわからんのんだけど、十二指腸の手前に少し小さな悪性のものがあるみたい。手術を受けんといけんから・・・。お好み焼きは少し休業かな。」

いつも店の看板娘で明るく元気な母もさすがに落胆していた。それ以上に、何とも言えない不安感をもって日々過ごしている父の気持ちは計り知れなかった。

一月五日に父は入院し、手術という運びになった。大みそかも正月も毎年のような賑やかさはなかった。人一倍自分の体に気を使ってきた父。お酒も好きだし、食べることも好きな父。この正月は、お酒もたしなまず、食べる量も減

った。しかし、病院の主治医から言われた「大丈夫。手術でとったらよいから。」という一言を信じ、手術を決意した。

病院に行く前に、父が、

「悪いものはとってきておかんといけん。医者を信じて取ってくる。待っとってくれ。病院には来んでええけいの。」

と私に伝えてきた。もうお医者さんを信じるしかない。私は、父を明るく元気に病院へ送り出した。

手術には、母と私の妹がつきそった。仕事をしていた私に、

「治療を行っています。大丈夫です。三人の孫のエネルギーもらっていますから・・。」

と母からのメールが届いた。安心はしていたが、結局居ても立っても居られなくなり、慌てて仕事場から二時間かけて病院に駆け付けたのであった。

手術が終わった父はすこし、小さくなった気がしたが、いつものようににこっと微笑んだ姿を見て、ほっとした。

何より父は生きている。

後日談であるが、人間ドックで診察してくださった主治医が胃カメラで様子を見て、「なにか胃がただれている。もう一回検査したほうがよい。」と気づいて見逃さなかったから、早期治療ができたとのことであった。父は、人間ドックのおかげで、早期発見・早期治療につながった。幸い、早期発見で、あまり大きくなかった癌で、このまま五年間何もなければ、大丈夫であると聞いている。今は、三人の孫のために学校の送り迎えをしてくれ、お好み焼き屋も以前通り店を開けることができた。

私自身も子供三人と妻のために、毎年人間ドックに通っている。今のところは、大きな病気も見つかっておらず、健康そのものだ。でも改めて父のこの件から、人間ドックの大切さを学んだ。

父を助けてくれた人間ドック。

「もうだいじょうぶで」と言ってくれた父の言葉を胸に、毎年の人間ドックを受け、周りの人に大丈夫と言えるように自分の体も家族の体も気遣える暮らしをしていきたいと思っている。

そして、父や母にはこれからもしっかりと生きてもらいたい。